

Comprehensive Art Education を意識した 幼年造形カリキュラムに関する研究

ノートルダム清心女子大学 小 田 久美子
岡山大学 高 橋 敏 之

A Study of the Art Curriculum in Preschool that Aims at Comprehensive Art Education.

Notre Dame Seishin University ODA, Kumiko
Okayama University TAKAHASHI, Toshiyuki

要 約

本研究では、絵を描くことに消極的な子どももそうでない子どもも、共に楽しみながら学ぶことが出来る造形カリキュラム研究の推進を目指す。子どもの生活に実際に浸透して親しみのある塗り絵遊びに着目して、これまでに積み重ねてきた研究を基盤に輪郭線を用いた造形活動を策定し、実践することで妥当性の検証を行う。その結果、輪郭線を活動に取り入れることで、具体的に表現が活性化の傾向を見せることが示された。

【キー・ワード】 幼児, 絵画表現, 輪郭線, 教育実践

Abstract

We researched the art curriculum that passive children to drawing the picture and children not so can study together. We focused to the coloring paper play that had infiltrated the children's life. And, examined the effectiveness of the outline based on current my research. As a result, it was shown that the expression was activated with the outline.

【Key words】 children, picture expression, outline, educational practice

1. 輪郭線の利用とその可能性

本論は、子どもの就学前造形遊びの中に塗り絵を応用した活動を取り入れることで、表現活動と鑑賞活動が無理なく融合される造形カリキュラムの研究を推進するものである。筆者は、これまでに幼児造形の新しい教育実践の方策について研究し、輪郭線を用いた塗り絵遊びを応用することが、絵を描くことに躊躇を感じ始める時期に到達する子どもにとって、教育的意義を持つことを明らかにして

いる。就学後教育を見越した教育実践としての具体的な援助方法について考察し、具体的実践として輪郭線を幼児の多面的な生活環境と関連させた造形遊びとして取り入れることは、子どもの「表現したい」という内発的欲求を引き出す働きかけをする点で、これまでにない新しい援助の方法であると言える。

「美術の教育は手段であり、美術を通しての教育が目的である」（福田，2007）と位置づけられているように、造形表現、図画・工作を含む美術教育は、美術を学ぶことを通して多面的・総合的な人間教育を目指している。就学前教育の中での扱いとしては、幼稚園教育要領において「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通じて、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」（文部科学省，2008）と記述されている。実際に、絵画を含む豊かな造形活動は、子どもの人間形成を行う人間教育である（園田，1976）だけでなく創造力を養い（Brittain，1979）、創造力の育成が認知能力の発達を促し、認知能力が思考を促進する（Thomas & Silk，1990）と言われている。ところが調査の結果、就学前の段階で8割以上の保育者が、絵画表現に積極的ではない子どもがクラスにあり、年齢が上がるほど増加すると回答している（小田，2005）。つまり小学校に入学する以前から、美術に積極的ではない姿勢が始まっている子どもが少なくないのである。このことから、描くことへの不安から引き起こされる絵画表現への躓きを乗り越えるために、子ども達は保育者の適切な関わりを必要としていると言える。絵画指導において日々暗中模索している保育現場に、楽しく皆で遊びながら学ぶような手だてを提示することが出来れば、幼児教育における造形表現の分野に新しい方法論を得られると思われる。そのような背景をふまえて、美術を通して包括的な人間力を育てるために、幼年造形から就学後の美術教育のねらいにスムーズにつながる援助カリキュラムを提案・考察していく。

2. 小学校での「鑑賞教育」につながる幼年造形活動を目指して

（1）図画工作と領域「表現」の比較

アメリカで1980年代に大きく取り上げられたDBAE（discipline based art education）も、現在はCAE（comprehensive art education）として形を変えながら定着しつつある。当時の日本でも取り上げられ、日本の美術教育になじむものであるか、その理念を取り入れることが出来るか、研究がなされた。美術の教育から人間育成を包括的に行うという概念は受容可能に見えたが、DBAEが基盤とする4つの柱の実践の、日本の美術教育における応用が難しいと考えられた。しかし結果として、日本の美術教育に「鑑賞教育」という大きな流れを、改訂された小学校以降の学習指導要領にもたらしたと言えよう。最新の学習指導要領を見ると、「表現」と「鑑賞」の共通事項が低学年にも新設されている。小学校第一学年及び第二学年の目標と内容の共通事項の中に、「（1）「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導を通して、次の事項を指導する。ア 自分の感覚や活動を通して、形や色などをとらえること。イ 形や色などを基に、自分のイメージをもつこと。」（文部科学省，2011）と記され、制作と鑑賞両活動を豊かにするための指導事項が示されている。これは、目的とされる「美術の教育」「美術を通しての教育」が体系化されたものであり、子どもが表現するための手技と表現するための心と、

その両方をバランスよく獲得することを求めていると言える。同時に、共通事項では「[共通事項]だけを題材にしたり、どの時間でも[共通事項]を教えるから授業を始めたりするなどの硬直的な指導を意図したものではない」(文部科学省, 2011年)とあり、教師は自然な流れから連続的に授業を展開していくような指導方法を求められている。保育現場では、教師が子ども達の活動の主体になることなく、子ども達の自主性や積極性を大切にしながら活動を進めていくことが、保育者の重要なねらいである。つまり表現と鑑賞に共通した調和のとれた能力の習得への配慮は、環境構成として保育者が準備し展開する適切な指導方法と類似している。

また昨今では、幼稚園と保育士両方の資格免許を有することを前提に子どもと関わる職に就くことが望まれ、養成課程においては保育士のその指導援助能力の強化が取り組まれている。2010年(平成22年)厚生労働省告示第278号による改訂では、「基礎能力」が「保育の表現技術」という名称に変更され、「子どもの経験や保育の環境を様々な表現活動に結びつけたり、遊びを豊かに展開するために必要な技術を習得出来るようにする」(保育士養成課程等検討会, 2010)と述べられている。そこでは、総合的な表現活動の展開が可能な保育者の養成を目指していることが分かる。養成課程に組み込まれたことから、保育者として総合的な教育を行うことが将来期待されていると言えるであろう。ただし、現在保育者が幼稚園や保育所で子ども達に望んでいる豊かな造形表現とは、技術の向上を目指すのではなく、生活の中での体験や興味を持ったことからイメージを膨らませて、それを自分なりに表すことである。特にこれまで就学前の子ども達に対して、「造形的な創造活動の基礎的な技能」(文部科学省, 2011)の向上をはかるような指導はあまり重要視されていない。表現するための心の育ちを重点的に捉えるという意味合いが大きいと言える。V.Lowenfeldの描画発達段階によると、子どもは9~11歳になると写実期に入り(Lowenfeld, 1947)、その時期になると、いくらかの子ども達は絵画表現に躊躇や逡巡を覚えるようになる。ところが岡田清(1967)が、日本の子ども達は「外国の子ども達よりも3~4年早く写生前期に入る」と指摘している。つまり写実期にさしかかり、支援を必要としている子ども達が小学校入学と同時に技能の習得を求められる状況である事実について、対策を講じる必要があるのではないだろうか。小学校における学習指導要領「共通事項」の新設は、中学校美術科と技術・家庭科への連携が主に唱えられている。だが生活全体が複数の領域にまたがっている就学前こそ、「表現」と「鑑賞」を総括した造形活動を無理なく展開することが可能であり、小学校教育につながる活動を始める包括的学びの場になりうるための、考慮の余地があるのではないかと考える。幼年造形における包括的学び(Comprehensive Art Education)とは、子どもの未分化な表現による総合的な活動から、生活全般に及ぶ総括的な学びを導くことである。共通事項で必要となる能力と資質は、就学前から総合的に始まることで、小学校図画工作科とうまくつながると考えている。

(2) これまでの研究経過の概要

これまでの研究において、塗り絵と子どもの絵画表現との関連性を考察してきた。塗り絵についての日本での歴史や、それ自体の構成、そして国内での状況や先行研究の概観を踏まえてどのような影響があるかを考察した結果、子どもの絵画表現における学術的な認識とその社会浸透との構造間にあ

る揺らぎを発見した。子どもを取り巻く環境の中で、様々な媒体で接触をする機会を得ていながら、美術教育からも幼児教育からも特に顧みられることなく放置され、野放しになっている塗り絵遊びの可能性を、視覚的に実証するべきであるという結論に達した。塗り絵は、多くの子どもが所有しており好む造形遊びであるだけでなく、輪郭が提示してあることから、絵画表現を苦手としている子どもの援助としての役割の可能性を持つからである。これまでに着手している研究において、年齢や発達によって造形的効果のある輪郭が異なるということが明らかになっている。表 1 に見られるように、特に 5 歳児にとって、物の形と色に対する固定概念が絵画に反映することが少なく、豊かな絵画表現への発展が最も期待出来るという結果が出ている（小田，2005）。

表 1 輪郭線を用いた絵画表現の年齢別効果

| | 絵画表現における影響 |
|--------|---|
| 2～3 歳児 | 即効性のあるものではなく、絵画内容に影響しないので、造形活動を活性化させる大きな要因にはならない。 |
| 4 歳児 | 色彩的な経験が豊富に得られるという点で、効果的なものである。子どもの色に対する概念が固定化する前に、出来るだけ多くの色彩経験を提供できるような工夫の必要がある。 |
| 5 歳児 | 輪郭線によって、絵画表現が最も活性化する。ものの形と色に対する固定的概念が絵画に反映することが少なく、輪郭線を有効に利用して個性的な表現が出来る、豊かな絵画表現への発展が最も期待できる。 |
| 6 歳児 | 色数や着色面積が減少し、輪郭に依存した絵画表現になる傾向があり、形式的絵画表現に終わってしまわず、絵画表現を活性化する造形遊びとして取り入れるには、工夫が求められる。 |

このことから、5 歳児のクラスである年長組での実践に焦点を絞る。

近年塗り絵は、フランス・カルティエ現代美術財団において「coloriage（塗り絵）展」が開催される（2002）など、文化的・美術的に脚光を浴び、芸術分野での認知を広めつつあると言える。また、ルーブルやオルセーなど欧州の美術館では所蔵作品の塗り絵を制作している。フランスでは、約 4 歳～12 歳の子も達が遊びながら学べる体験型のワークショップを主に国立美術館で提供している。そこでは作品を取り上げながら様々な技法での制作が行われ、芸術に感心を持つ手がかかるような工夫がされている。特に作品鑑賞を基盤にした表現活動は、1990 年にルーブル美術館において「子どものアトリエ」が始まったことを通じてよく知られる教育分野であるが、日本においてはその受容が進んでいるとは言えない。そこで、これまで研究してきた塗り絵遊びを応用した造形遊びを吟味・検討する。

3. 教育実践にむけて

(1) 子どもの絵画に表れる表現内容の調査

輪郭線を用いた教育実践を模索するため、子どもの絵画作品の実際を確認する必要がある。子どもが白色の画用紙に自由に描く時、どのような内容や特徴、好みが見られるのか把握し、適切な輪郭線の検討をする。子ども達の、遊びを通しての総合的な発達をねがい設定されている幼稚園教育要領の基本的な領域から、相互に関連しながら展開するような輪郭線の抽出を試みる。

①実施年月日及び調査対象者

調査は、岡山県内の私立S幼稚園年長5歳児クラスABCの3クラスにおいて、2011年5月10日、5月17日、5月18日に実施した。調査実施日の天候は、すべて晴れであった。幼児数はAクラス男児10名・女児16名、Bクラス男児10名・女児16名、Cクラス男児9名・女児19名、計80名である。

②調査手続き

登園し、自由遊びの後に朝の集いを終えた子ども達に対して、白色の画用紙を提示して絵画遊びを行う。このとき漠然と「絵を描きましょう。」と言うのではなく「大好きなものは何か？」と問いかけ、子どもからの様々な分野からの回答を引き出す。その回答内容を具体的に取り上げ話題にした後で、「それではこれから大好きなものを何でも描いていいです。描いて先生に教えてね」と言う。子どもの描画への興味を確かめながら、楽しい活動であるように配慮する。画用紙は縦に使っても横に使ってもよいこと、画用紙とパスを持って机についた人から活動を開始してもよいことを伝え、活動を促す。作品が完成したら、子どもが調査実施者の所に持参するように指示し、完成を確認の上、子どもの名前を画用紙裏面に記入して回収する。

③描画材料

8つ切り画用紙を80枚用意した。また描画には子どもの所有している16色パスを使用した。

④結果と考察

それぞれの作品は、いくつものテーマ内容が組み合わさって出来ている。分類すると大きく分けて、植物に関連する内容・動物に関連する内容・人物・その他、が描かれていた。それぞれの内容の詳細とその表現内容を描いた幼児ののべ数を、表2にまとめた。

表2 描かれた表現内容ののべ数

| 植物に関する内容 | | | | | 動物に関する内容 | | | | | 人物 | その他 | | | | 白紙 |
|----------|----|----|----|----|----------|---|----|-----|----------|----|-----|-------|------|----|----|
| 木 | 花 | 果物 | 野菜 | 草 | 昆虫 | 鳥 | 恐竜 | 小動物 | 擬人化された動物 | | 乗り物 | 家(建物) | 鯉のぼり | 風船 | |
| 13 | 33 | 20 | 3 | 12 | 11 | 2 | 1 | 16 | 5 | 28 | 12 | 5 | 6 | 1 | 1 |
| 81 | | | | | 35 | | | | | 28 | 24 | | | | 1 |

作品に見られる植物の内容は、桜の木、花、葡萄やさくらんぼなどの果物である。花は、ほとんどがチューリップのように花茎がまっすぐ伸びて1つだけ花が咲いている有皮鱗茎の形態で、多くの作

品の中に登場している。動物の内容は、熊や麒麟、犬、うさぎなどの小動物である。人物の内容は主に、家族、友人、担任の教師である。その他に分類された鯉のぼりは、季節柄身近にあったものであると考えられる。

約9割が描いた3つのカテゴリー（植物・動物・人物）は、子ども達の生活環境の中で、最も親しみのある身近なモチーフであると言えよう。幼稚園教育要領にある領域を視野に入れるために、それらのいくつかを相互に関連させて造形遊びを考える場合、領域と前記の3つのカテゴリーとの関係を見なければならない。

「植物」と「動物」は、飼育している動物や、園庭に咲いていたり栽培されていたりする植物など、子ども達の生活環境にある、動植物への親しみや興味・関心の表れであると考えられる。「人物」は、描かれた家族や友人、担任教師という内容からも、子ども達の間関係への関心が発揮されている。また、教育実践として取り入れる輪郭を考慮する時、輪郭線は子どもが興味を持ち、それを活用したいという意欲のわくものでなければならない。そこで、予備調査の子どもの絵画表現の内容として表れた上位のモチーフである「植物・動物・人物」の各分野から、それに関連した輪郭線の作成に取り組む。そして「動物」「植物」を通した領域「環境」と、「人物」を通した領域「人間関係」に、それぞれ造形遊びそのものである「表現」、そして領域「言葉」からイメージを広げるために絵本を活用して導入を進めるという活動の展開方法を用いる。

（2）輪郭線と活動方法の検討

3つのカテゴリーからの輪郭線

①植物 テーマ「どんな植物を知っているかな」

植物に関連した輪郭線として、図1のような大まかな草の形の描かれたものを用意する。あえて子ども達がよく表現していた樹木や伸びた花茎の形は採用せず、空間にどんな植物も描けるように構成した。導入として『ちいさなき』を読み聞かせ、花や樹木について話をする。子ども達が栽培している草木や、知っている花・好きな花木、果物になっている木などについて話し合う。

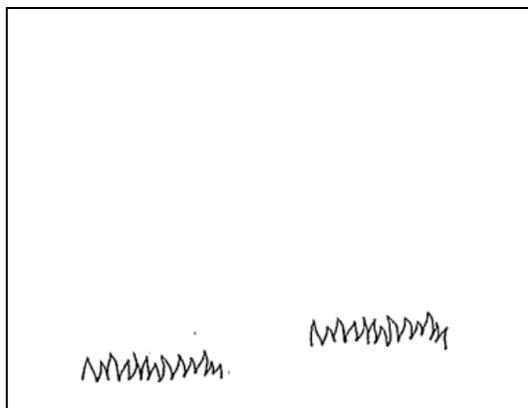


図1 植物に関連した輪郭線のある画用紙

この絵本の内容は、初め小さなすみれと同じくらいの背丈だった木が、だんだん大きくなっていく様子を、あかちゃんの木・おかあさんの木という言葉を使って、子ども達に親みや安心感が持てるような説明がしてあるものである。また、季節によって葉の色が変化するものもあることにも触れ、色彩的にも固定されず変化が感じられる。なお、輪郭線のある画用紙と白色の画用紙は選択出来るようにしておく。

②動物 テーマ「どんな動物が好きかな」

動物に関連した輪郭線として、図2に示すような、動物の尻尾のような体の一部が提示された画用紙を用意する。第一印象や形そのものに対する存在感が非常に強い、動物の口や目などを使用することは避けている。形そのものが未完成で、そこから様々な種類の動物が想像上見い出せて、発展が期待出来るように工夫した。2つの輪郭線の方向が異なることにより、右向きの動物と左向きの動物を描くことが出来る。導入として、どんな動物を知っているか話し合う。

その後、『しっぽのはたらき』を読み聞かせて活動を始める。この絵本は、11種類の動物の尻尾とその働きについて紹介している。絵本の読み聞かせをした時、子ども達の「どんな動物のしっぽか」という反応がとても良い絵本で、写実的に描かれた尻尾には多様性があり、想像の範囲が広がり輪郭線との連動が期待されることから、妥当であると考えた。なお、輪郭線のある画用紙と白色の画用紙は選択出来るようにしておく。

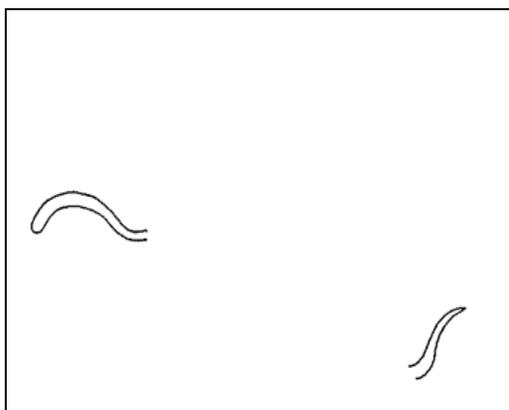


図2 動物に関連した輪郭線のある画用紙

③人物 テーマ「身のまわりにいる人を描いてみよう」

人物に関連した輪郭線として、図3に示すような、洋服の一部が提示された画用紙を用意する。動物と同じく第一印象や形そのものに対する存在感が非常に強い、口や目などの人間の体の一部を使用することは避け、何色に着色することも考えられ、加筆しやすく未完成であるイメージを与える輪郭線として、洋服の一部を採用している。活動の導入として、人間が裸ではなくいくつかの洋服を着ていることを知らせる。二人一組になって向かい合い、それぞれの頭から足まで体の部位の数や大きさなどの確認と再発見を行う。

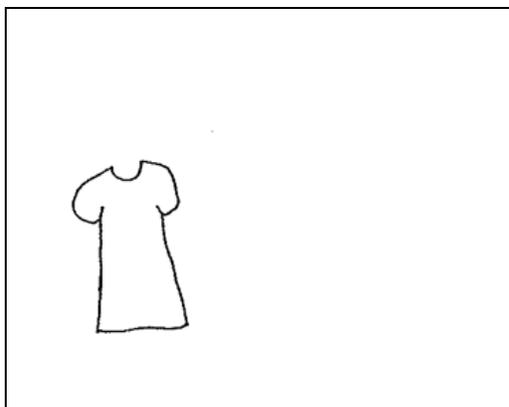


図 3 人物に関連した輪郭線のある画用紙

その後、『だぶだぶうわぎの男の子』を読み聞かせる。この絵本は、青い上着を着た男の子が、「私」のところに遊びに来て、夜に上着を着たまま窓から飛んでいってしまうというファンタジーで、洋服と人間に特化した内容である。登場する男の子は、作中で母親を恋しく思いながらも友達や担任教師や友達の母親と関わり、絵を描いたり大人に甘えたり眠くなったりする点で、子どもの日常生活を再現している。しかも子ども達が意識しないではいけないような特徴ある洋服を着ている。人との関わりと着衣についてテーマにしていることが、この絵本を選定した理由である。なお、活動時は、白色の画用紙も人数分用意しておき、どちらに描いてもよいことを知らせ、子ども達は活動の際に、輪郭線のある画用紙と白色の画用紙を自由に選択出来るようにしておく。

④人物・動物・植物の 3 種類の画用紙を選択出来る活動 テーマ「そらいろのたね」

4 つ目の活動として、①②③で用いる全ての画用紙と白色の画用紙を子ども達の絵画表現の選択肢として用意し、自由に選べるようにする。人物と動物と植物の全ての内容に特化した絵本として『そらいろのたね』を選定し、導入として読み聞かせる。この絵本の内容は、主人公の少年ゆうじが、きつねからもらった「たね」を植えると空色の家ができてきて、植物のようにどんどん大きく成長し、その家のサイズに合わせるように小型動物からゆうじの友達、大型動物の順序でその家に集まってくるが、最後には家は風船のように破裂してしまうというものである。きつねが、家の破裂に仰天して目を回しているところで絵本は終わる。子どもにとって印象に残る要素が、大切に家を育てる人間の主人公であったり、たねを持っていたきつねや次々に現れる動物であったり、植物のようにみるみる成長する家であったりと着眼点が 1 つに限らないところが、活動にふさわしいと考えた理由である。これまでの実践①②③において既に利用した輪郭線のある画用紙を用いることは、有意義なことであると考えている。なぜなら子どもは、「与えられた輪郭を物の形として獲得しても、その形に一辺倒するのではなく、イメージして変化させていくことができる」(小田, 2002) と考えられるからである。さらに Thomas & Silk (1990) が、子どもが描画することによって、「表象の中に符号化された概念についての思考を促進できる」と述べていることから、同じ輪郭を再度用いることで、再び想像力を働かせて異なる表現として再成され、思考力が促進されると考えられる。すべての輪郭線を用いた活動と同じく、白の画用紙が選択可能であることによって、輪郭線という視覚的なきっかけを必

要としてない子どもが無理に輪郭線に接触することはない。しかしこれまでの調査結果から、年が上がるほど輪郭線のある画用紙を好んで選択する率が上昇する（小田，2002）ことが明らかになっているので、多くの子どもが輪郭線のある画用紙を選んで使用することが推測される。輪郭線については、図1～3のようにできるだけ単純で基本的な線のみを残し、自由に加筆できるように配慮している。

（3）輪郭線を用いた活動の実践

①方法と対象

白色の画用紙での調査に続き、既に記した「植物」「動物」「人物」に関する輪郭線と活動方法についての調査を実施する（表3②～⑤）。最後に再び白色の画用紙での調査を行うことによって①と⑥の比較も行う。

②資料の整理

- ・色数 絵画表現の中で何色使用されているかを数える。使用したパスの本数は16本であり、全色使用で16色となる。
- ・着色面積 画用紙1枚分の面積に対してどれだけの割合を描画及び彩色に費やしたかについて、画用紙を占有する着色面積を算出する。方法は、1cm×1cmの升目の入っているトレーシングペーパーを作品の上に置き、色をつけている面積がいくらかを数える。なお、画用紙の面積は、縦27cm×横38cm=1026cm²なので、全着色で1026cm²になる。
- ・画用紙の種類 白色の画用紙を選択したか輪郭線のある画用紙を選択したかを確認する。

表3 調査対象者の内訳と実施月日

| クラス名 | クラスの人数 | 実施月日 | | | | | |
|------|------------------|------|----------|----------|----------|-------------|------|
| | | ①白 | ②白or「植物」 | ③白or「動物」 | ④白or「人物」 | ⑤白or②or③or④ | ⑥白 |
| A | 男児10名・女児16名 計26名 | 5/10 | 5/25 | 5/31 | 6/14 | 6/23 | 7/12 |
| B | 男児10名・女児16名 計26名 | 5/17 | 5/26 | 6/2 | 6/10 | 6/28 | 7/11 |
| C | 男児9名・女児19名 計28名 | 5/18 | 5/27 | 6/7 | 6/21 | 6/30 | 7/14 |

③結果と考察

算出結果を表4にまとめた。輪郭線のある画用紙の選択率は、②から④にかけて徐々に低下するが、植物・動物・人物の3つの輪郭線と白色の4種類の画用紙からの選択が可能な⑤において再び上昇している。また、①と⑥の色数平均と直色面積を比較すると、①よりも⑥の結果の方がどちらも増加している。このことから、輪郭線のある画用紙での活動を行った後に、絵画に対する積極的な姿勢が上昇していることが伺える。

表4 色数・着色面積と輪郭線にある画用紙の選択率

| ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | | | ⑥ |
|-----------------------|--------|--------|--------|--------|-------|-------|-----------------------|
| 色数平均 | 輪郭線選択率 | 輪郭線選択率 | 輪郭線選択率 | 輪郭線選択率 | | | 色数平均 |
| 7.30色 | 65.8% | 40.0% | 37.0% | 52.8% | | | 8.32色 |
| 着色面積 平均 | | | | 植 | 動 | 人 | 着色面積 平均 |
| 292.60cm ² | | | | 31.6% | 23.7% | 44.7% | 321.05cm ² |

Aクラスの男児・S（5歳5か月）は①の調査で、白色の画用紙を前にして、最後まで何も描かずに終わっている。この男児のように、一般的に5歳児クラスには、白色の画用紙を前に、描き出すことに逡巡する子どもがいる。については、②～⑥の調査での男児の表現の変化に注目する。

Sは、②～⑤の全ての活動で、輪郭線のある画用紙を選択した。絵画表現の変容を資料1に示す。当初は、画用紙に何も描くことなく活動を終わっていたが、植物の輪郭線を選択した②以降は、少しずつ表現を行うことが出来ている。⑤においても再び植物の輪郭線を選択していることより、樹木や草木、昆虫を描くことに興味を持っていることがわかる。③では蛇や蟹、テントウ虫などを描き、④では青色の服を着た人物を描き始めている。最終的に⑥では、①の時のように表現に躊躇することなく、画用紙に描画することが可能になっている。輪郭線のある②や⑤のように様々なものを描くには至っていないが、表現することに対する意欲が感じられる。Sにとって、輪郭線というきっかけにより、絵画表現が活性化する手がかりを得たと考えられる。

資料1 S (5歳5か月) の絵画の変化



4. 課題

本研究は、「輪郭を提示する」という、表現活動に直接働きかける手段により、子どもの絵画表現が活性化することを目指している。多くの子どもは塗り絵が好きであり、親しみのある遊びの1つであると言える。特に造形活動にあまり積極的ではない子どもにとって、豊かな絵画表現への手がかりとなり得る。5歳児クラスの子どもの作品の調査と分析を続け、考察・論述することがこれからの課題である。そのことによって、子どもの造形的躰きに関する困難な諸問題への具体的対応の先駆となることが期待される。

引用文献

Brittain,W.L.(1979).Creativity Art and the Young Child,213. (黒川健一/監訳:『幼児の造形と創造性』,1983,黎明書房,218.)

第4回保育士養成課程等検討会(2010).3.

福田隆眞(2007).美術科教育の基礎知識 建帛社,4.

ジェニー・ウィリス(2000).スーザン・バーレイ/絵 今江祥智/訳 だぶだぶわぎの男の子,ほるぷ出版.

川田健(1969). 藪内正幸/絵 今泉吉典/監修 かがくのとも傑作集 しっぽのはたらき,福音館書

店.

神沢利子 (2008) .高森登志夫/絵 ちいさなき,福音館書店.

Lowenfeld,V.(1947).Creative and Mental Growth,505.(竹内清ほか訳『美術による人間形成』,1974,黎明書房,623.)

文部科学省 (2008) .幼稚園教育要領, 2.

文部科学省 (2011) .小学校学習指導要領, 2, 3.

中川李枝子 (1995) .大村百合子/絵 こどものとも傑作集 そらいろのたね,福音館書店.

岡田清 (1967) .幼児の絵の見方 創元社,144.

小田久美子 (2002) .子どもの豊かな絵画表現を活性化させる援助の有効性 家庭教育研究, 7,41.

小田久美子 (2005) .絵本の読み聞かせと輪郭画用紙の活用が幼児の絵画表現へ与える影響 乳幼児教育学研究 ,14,12,13-17.

園田正治 (1976) .子どもの絵と脳のはたらき 黎明書房,59,62.

Thomas,G.V.& Silk,A.M.J.(1990). An Introduction to the Psychology of Children's Drawings, 57-58. (中川作一/監訳:『子どもの描画心理学』1996,法政大学出版局, 179-180.)

謝 辞

本研究の調査にあたりご協力いただきました, 私立S幼稚園の先生方, 園児の皆さんに心より御礼申し上げます。